

建設技術研究所 正会員 ○向原俊一
 東京工業大学 正会員 中村良夫
 東京工業大学 正会員 北村真一

1はじめに

景観のイメージは、地理的（空間的）イメージと風景イメージから成るものと考えられる。前者はK. リンチの研究に代表される都市空間の平面図的イメージの研究であり、後者は一つの風景（シーン）の透視図的イメージの研究である。特に風景のイメージ構造の研究は景観デザインにおける基本的コンセプト決定において必要な景観の様式、並びに基本的操作要素を抽出する上で重要な意味を持つものと考えられる。

2 研究の目的と構成

以上の観点から、本研究は風景のイメージの構造を明らかにしようとするものであり、河川空間を対象として、以下の課題の実現を目的としている。

(1) 風景イメージのゲシタルト構造を明らかにする。

(2) 風景イメージの意味的構造を明らかにする。

研究の構成は、①ゲシタルト心理学の現実の風景への適用による、風景イメージ構成要素の分析、及び②景観体験の蓄積により高度にイメージ化された風景のイメージ構造の分析からなり、図-1に示すとおりである。

3 風景イメージのゲシタルト構造の分析

シーン（風景）のイメージ化のプロセスの仮想モデルを図-2に示す。シーンはゲシタルト的に知覚されやすい図的まとまりの集合としてイメージ化され、さらに景観体験の蓄積によりそれらの要素が純化した形で記憶されるものと思われる。

3-1 風景における図的まとまりの限界の抽出

ゲシタルト概念の一般風景への適用を考えた場合、視角的限界が存在し、それが図的まとまりを形成する重要な制約条件の一つとなり得る。こう仮説を裏づけるため、星座を構成する星間の視角距離の算出し、日常生活空間における図的対象の視角を測定した。（図-3, 4）その結果、図的まとまりを得る視角範囲は約 10° ~ 20° あたりまでが適当であると思われる。

次に、スクリーン上に映し出された多種の同心円の中から見やすいと思われるものを被験者に答えてもらうという実験により、見やすい範囲として、約 10° ~ 20° という値が得られた。（図-5）これにより、見やすい範囲の視角の大きさは距離と注視の程度により変動し、遠くを注視するに従い 10° に近づくものと考えられる。

3-2 河川風景イメージのスケッチ再生実験による抽出

被験者に河川風景のスライドを呈示し、それをスケッチで再生させるという実験により、河川イメージの記憶像を抽出した。各空間タイプ別の再生要

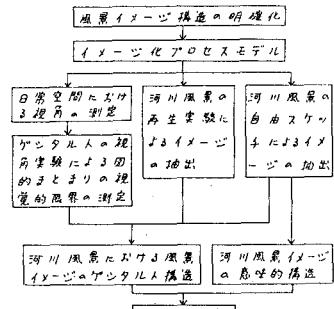


図-1 研究の構成

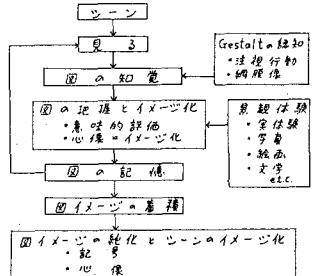


図-2 シーンのイメージ化プロセスモデル

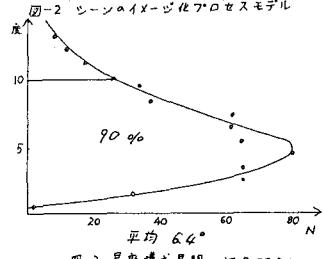


図-3 星座構成星間の視角距離

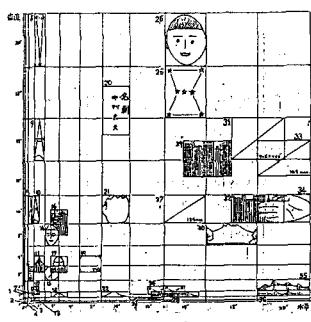


図-4 日常生活空間の図の視角

素(表-1)を見ると、スライドに現われた要素の視覚特性上の固定傾向が読みとれる。常に再生度の高い要素としては、水際線、独立した山、水面から突出した岩や洲などがあげられる。また、河川構造物のような特異な素材と形態の再生率が高いことを明らかになった。さうに要素各々の視覚的形態に着目し、各スライドごとの要素を統合して模式的に表現した。(図-6)これらのデータから、風景において固的まとまりとして知覚されやすい性質として、①境界線が明瞭、②境界線が鋭角的である、③流れの速い、あるいは変化の様相を呈する水面、等があげられる。これらの傾向は、図と地が常に反照しながら構成されている風景知覚において、図と地の関係が安定した状態の条件を満たしているものといえよう。

3-3 河川風景イメージの自由スケッチによる抽出

印象に残っている河川の風景を自由にスケッチで再現してもらうという調査により河川風景のイメージを抽出した。スライド呈示スケッチ再生実験と自由スケッチ調査の再生要素を河川空間タイプ別に比較すると、ともに因的要素を多く描いていた傾向がみられる。しかし前者に比べて後者は、①要素が多い、②一視点から見られない要素が描かれる、③表現が画一化する、等の特徴が見られる。これは、ある視点における風景のみのイメージではなく、多数の視点の経験の蓄積を取捨選択し、一つの代表的な視点からの眺めに集約したイメージの表現であるためと考えられる。

4 河川風景イメージ構造の分析

4-1 河川風景イメージの特徴

自由スケッチ調査結果の単純集計(表-2)等により、イメージとして定着した河川風景の特徴が明らかとなった。以下に至るものとあげる。
 ①河幅の狭い河川では流軸景が多く、河幅の広い河川では対岸景が多い。
 ②上流タイプでは山地の景が、中流、下流タイプでは市街地の景が多い。
 ③視点場所は橋の上、天端、水辺等、水際に近い場所が多く、視軸は上流方向で崩壊が多い。
 以上の特徴より、一般に河川の図としてまとまりるために両岸を一体に捉えようとする傾向から、水際線の捉え易い視点をとることと、広い河川では川が狭く見える視点をとる傾向にあることが明らかとなった。

4-2 河川景観の様式

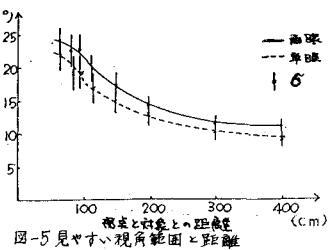
自由スケッチ調査のデータを林の数量化理論編成類により分析した結果、10タイプの河川景観の様式が抽出され、その特徴が明らかになった。(表-3)これらの景観様式は現代人の意識に定着した河川風景イメージの内容を示していると同時に、その中に日本人の河川の景の見かたを読みとることができる。

5 結論

本研究の結論は、以下にまとめられる。

- (1) 風景イメージの因的構成要素が明らかになり、阿川風景におけるゲン
コタルト法則の基本原理が明確となった。

(2) 阿川風景イメージの基本的様式が抽出され、それらと特徴づける①構
成要素群、②構図、③情調が明らかになった。



卷之三

表-1 各空間タイプ別再生要素

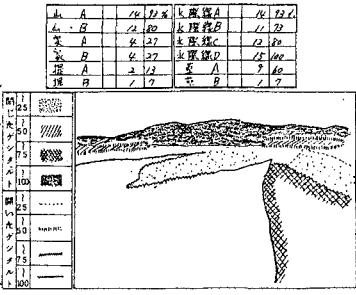


図-6 スケッチ再生実験結果の模式表現

表-2 篡觀規定要因の單純集計

河	漢	8.0%	水庫	44.5%
川	小川 漢流	20.8	南湖	65.6
形	中流	39.2	均 壓	28.8
狀	下流 大河	47.2	波動	47.2
	洞口 鄉	2.4	全佈	24.0
	小用木	7.2	上流 向	50.4
	山地	26.4	下流 向	22.4
空	野 圓周	32.0	0°~5°	25.6
間	山地 防	41.6	5°~10°	20.0
	水上	30.4	10°~20°	13.6
	水 迂	21.6	20°~30°	6.4
點	近似如體外	9.6	30°~50°	1.2
場	大陽 莫因	28.0	50°~100°	8.0
	洞內 陰內	10.4	100°~	15.2

表-3 河川景観の様式

タイプ名	草 畜 猫	情 調	種 因
A 上級	若木	新鮮な 葉の木本樹木	味い 全・始
	山鶴	小葉	固有味 変化あり
B 中次大河川	達心の山茶	根	細大名 美しい
	山開闢	紫蘇	細合名 静合名
C 中次山地	木本	植物	人工的 在自然上
	山開闢	ベンチ	過度的 静合名
D 中次久野川	柏木	火	自然的 火の存在
	山開闢	木	無自然 無運動
E 中次山中川	楓	水被り山の木	自然的 静合名
	柳	葉	味い 全・始
F. せきとう 公園	山原	鳥	人工的 純自然
	柳	林木の小人	美しい 固有味
G 中次山中川	楓の木の山	樹脂	美しい 美・清潔
	山開闢	木本	味い 奇異味
H 下段久野川	楓	ソリ	自然的 無自然化
	柳	根	固有味 無運動
I 下段久野川	柏	銀鈴	無自然 の存在
	山開闢	森	無運動 固有味
J 下段久野川	山茶	泡	細大名 味い
	銀葉	木被り	細合名 無運動